不安な心理を理解してケアにあたる
介護職員研修参加報告

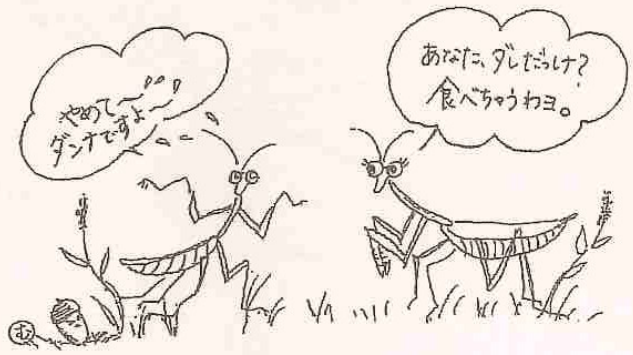
本年度 1 回目の認知症地域支援推進員事業の介護職員対象認知症ケア研修。今回は、十文字学園女子大元教授でグループリビングえんの森住人でもある安岡芙美子さんの講義である。かれこれ半世紀前に東京都に福祉職として入職、高齢者介護の変遷を見られてきた。配布された資料に先生の柔らかな口調が想像力を膨らませてくださり、認知症が痴呆と呼ばれていた時代の、自分は経験したこともない現場の出来事を色鮮やかにイメージしながらお話を伺うことができた。

アルツハイマー型認知症の方々が一緒にテーブルを囲み集うと、会話はちぐはぐで行き違っても、楽しそうに輪の中で過ごされるということ。極端な症状を持つ少数の方の行動ばかりが強調されがちな現状もあるが…。

明るく見えようと、不穏であろうと、認知症の方の根底にある心理は「不安・焦燥」だといわれる。記憶の上に積み上げてきた知識や自身そのものが崩れていく状態を「断崖絶壁の上を 1 人で歩いていくような感覚」と表現した人がいるそうだ。その不安をどう和らげていけばよいのだろうか。強い不安や焦燥感には服薬などの医療的アプローチがメインではなく、介護する側と本人の関係を良好なものにすること、すなわち介護者は認知症の方の心理を理解した上で、本人に敬意を持って接すること。これまでに接してきた方々のお顔が頭をよぎる。自分はどのように接してきただろうか、改めて思い返す。

このような事例を紹介された。いつも厳しく教育的・訓練的に接するご主人の存在を妻は意識から消してしまった。ご主人にカウンセリングを受けて対応の仕方を学んでいただき、妻への接し方が優しくなると、妻は医師に「主人が海外赴任から戻ってきた」と、存在をよみがえらせたそう。

どういう関係なのかは忘れ、わからなくなっていても、信頼できる人間と繋がる安心感。ヘルパーもそういう存在でありたい。利用者と同じく不安を抱えているご家族に穏やかに過ごしていただきたい。その人らしさがようやく見えてくればもっと人となりを知りたいと思い、その人の人生の一端に触れて寄り添える。硬い表情で日々迎えてくださったＡさん。訪問のたびに冷たい手の甲を包み、挨拶をし、ケアを重ねた。いつしか私の手を包みこんでくださるように。心が繋がったと思える経験は、前に進む原動力となる。経験を積み、学んでいこうと思えた今回の研修であった。



（ケアサポートえん／村上千寿子）